
滲んだ世界で、見えない言葉を。

うわの空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

滲んだ世界で、見えない言葉を。

【Nコード】

N4161Z

【作者名】

うわの空

【あらすじ】

休職し、精神科に通う俺と、不登校気味の彼女の物語。

細かい説明を省いている部分もありますので、各々の解釈で楽しんでいただけたら幸いです。

プロローグ

俺はあの時、どんな顔をしていただろう。もしかしたら、笑っていたかもしれない。

高校二年の冬、両親が死んだ。殺人事件だった。

見ず知らずの人間に襲われた母、それをかばった父。——二人とも、ナイフで刺されて死んだ。犯人の動機はいたって簡単。『誰かを殺したかったから』だ。それ以上でも以下でもなかった。

通り魔による殺人事件として、しばらくの間テレビで報道された。

路頭に迷う、という表現は間違えているかもしれない。頼れる親戚なんていなかったけれど、頼れる大人が周りにいたことは確かだ。^{かれら}大人は、独りになった俺を支えてくれた。けれど、両親を失ったショックは大きかった。どうして俺の親が死んだんだろうと、いつも考えていた。

俺の前を歩いている女性の後ろ姿を、ぼんやりと眺める。歩きにくそうなヒールを履き、のんびりと歩くその姿を。……どうしてそんなに、無防備に歩けるんだろう。この前、通り魔のことが報道されていたはずなのに。

俺は猫背で歩き、常に後ろに怯え^{おび}ながら過ごすようになった。

あれはいつだったろう。今思えば、両親が死んでから二週間も経っていなかったかもしれない。――彼女が、そう言っていたから。

あの日は、とても寒かった。

公園のベンチがやけに冷たかったことだけ、何故か鮮明に覚えている。

気づけば俺の側に、小さな女の子が立っていた。三、四歳だろうか。彼女は俺の後ろを見上げて、無表情に近い笑顔で言い放った。

「おとーさんとおかーさん、うしろ。なってる。ごめんって」

それだけ言うと、少女はどこかへ行ってしまった。

どうして、このことを忘れていたんだろう。

ずっと忘れていたんだ。

俺も、彼女も。

4か月前

精神科の待合室で、俺はのんびりとテレビを見ていた。

精神科。その待合室といえば、どんなイメージをもたれるだろう。皆一様に俯いて黙りこくって、泣いてる人もいたりして、この世の終わりみたいな場所……というわけではない。少なくとも、俺の通っている精神科の待合室は、内科のそれと大差なかった。

『精神科・心療内科』という看板を掲げているところが、精神科なのか心療内科なのか、俺には分かりかねる。いやまずその前に、精神科と心療内科の違いもよく分かっていない。

そしてぶつちやけ、そんなことはどうでもよかった。

俺はテレビから視線をそらし、さほど広くない待合室をぐるりと見渡した。夕方四時、いつもなら割と混雑する時間帯だが、今日はそうでもなかった。俺の他に、待合室にいる患者は四人。その一人を、俺は素早くチェックした。

一人目は二十代後半くらいの若者で、携帯をいじっている。お洒落なパーカーに腰パンという今時の恰好をしていて、見た限りでは『一般的な』男性だ。

二人目は、イヤホンで音楽を聞いたまま、ぼんやりと壁を見つめている女性。年齢は二十代前半だろうか。時々、鞆の中から携帯電話を取り出して、時刻を確認している。

三人目は、病院に置かれている雑誌に目を通していた。年齢は四十代半ばほどで、男性。読んでいる女性向けの週刊誌には（残念ながら、この病院に置かれている雑誌のレパトリーは少ない）、表紙に赤いマジックで『持ち出し厳禁』と書かれていた。

四人目。俺はその子の姿を見て、心臓がとび跳ねるのを自覚した。今まで何度か見かけたことのある、その顔。

腰まである、長くて艶やかな黒髪。一言で言うなら、整った顔。けれどその目はどこか虚ろで、いつも宙の一点を見つめている。目の色は茶色と焦げ茶色の間くらい。――彼女の瞳の色を、俺は表現できない。

初めて見かけたその日から、彼女のことをずっと気になっていた。機会があれば声をかけてみたい、とも。ただ、問題点が一つ。

今日もそうだが、彼女はいつだって制服姿だった。黒を基調としたセーラー服。見覚えのあるそれは、この近くにある中学校の制服のはずだ。――そう。つまり彼女は、中学生だった。

対する俺は二十七歳。学生ですらない。声をかけづらい理由は、これだった。

俺がこの精神科に来たのは今から二年前、二十五歳の時だった。仕事によるストレス、そこからきた『鬱病』というのが俺の病名。会社を休み、自宅療養と薬物療法をしましょうというのが主治医の

判断だった。

俺が通院し始めた時にはもう、彼女もこの病院に通っていた。そのころから、一人で。

当初、『精神科のお世話になるなんて……』などと考えていた俺は、待合室の椅子に座っている彼女の姿に目を丸くした。

誰にも顔を見られないよう俯いて、猫背になっている自分が馬鹿らしいと思えるくらい、彼女は堂々としていたから。

「今時、鬱病なんて誰だつてなるよ！」

世間ではそう言われ出したものの、いざ通院するとなるとやっぱりいろいろ違うのだ。近所の目というか、周囲の目が気になって仕方がない。……これも、症状のうちの一つなのかもしれないが。

二年間病院に通い続け、俺はようやく社会復帰目前のところに来ていた。職場の人間は優しく、『ゆっくり戻っておいで』と言ってくれた。近々、復帰の挨拶に行きたいと思っている。

俺はテレビから流れているクリスマスソングを聞きながら、今年のクリスマスも独りでケーキを食べる羽目になるんだろうなと考えていた。

「職場復帰は来年度、四月からでいいでしょう。約四力月後ですね」

主治医のてるてる坊主にそう言われ、俺は嬉しさ半分、不安半分で診察室を出た。ちなみに（もちろんというか）、主治医の本名はてるてる坊主などではない。俺が勝手にそう呼んでいるだけで、その由来は……彼の頭頂部が『てかてか坊主』だったからだ。

——四か月後か。二年ものブランクがあるのに、うまく働けるだろうか。

そんな不安も抱えつつ、俺は待合室の椅子に腰かけた。この病院は規模こそ小さいものの薬局を併設しているので、薬を処方された場合は、わざわざ外の薬局に行かなくても院内で受け取ることができる。ただし、かなり待たされる時もあるのだが。

待合室には、俺と、例の女子中学生しかいなかった。他の患者は早々に診察を済ませて帰ったらしい。彼女も薬待ちだろうか、俺はなんとなく、斜め前にいる彼女の方に目をやった。

目があった。

慌てて目をそらしたのは俺の方だった。まるで、授業中に好きな異性を覗き見ていた男子中学生のような反応。自分自身でもおかしかったが、彼女から見てもおかしかったらしい。忍び笑う声が聞こえてきたかと思うと、

「こんにちは」

向こうから声をかけてきた。

「あ、えっと、……こんにちは」

「ここでよく会いますね。診察のペースは二週に一回ですか」

彼女は臆することなく、俺に話しかけてきた。逆に、彼女よりも年上のはずの俺は、完全にパニック状態だった。

「あ、まあ、そんな感じ」

そんな感じってどんな感じだ。彼女は俺の慌てっぷりを見て、ほぼ笑んだ。

「……もしかして、お話しするの苦手ですか？」

「や、そんなわけじゃなくて」

会話する相手が君だから緊張してるんだ、とはさすがに言えなかった。

「よかった。話しかけないほうがよかったのかと思いました」

その時、薬局からしゃがれたおばさんの声で「シンドウさん」と呼ばれるのが聞こえてきた。彼女は返事をせずに立ち上がる。

『彼女の苗字はシンドウ』という情報を、俺は頭に叩き込んだ。

彼女が薬局で貰ってきた薬の量を見て、俺は驚きを隠せなかった。袋の数を確認したわけではないが、十種類はあるんじゃないか。それらを鞆に放り込む彼女に、

「君も二週に一回、ここに来てるの？」

尋ねてみると、彼女はうつすらとほほ笑み首を振った。

「私は週一、ですよ。……驚きました？ 薬の量」

驚いたよと素直に肯定はできなかったが、黙りこむ俺を見て、彼女はふっと笑った。

「主治医が薬好きなのと、私自身に色々症状が出ているせいもあって、どうしても薬の量が増えるんです。不眠、抑鬱、パニック。幻聴幻視その他もろもろ」

「……そうか」

としか返せない自分が酷く情けなかった。

その時ちょうど俺の名前も呼ばれて、俺は自分の分の薬を受け取った。抗鬱薬が数種類と、睡眠薬。全五種類。これでも多い方かと思っていたが、俺の二週間分の薬の量は、彼女の一週間分のそれよりも少ないように見えた。

彼女は俺の投薬袋を見ても、薄い笑みを浮かべているだけだった。

病院から一歩外に出ると、冷たい外気が頬に突き刺さった。スカ
ート姿の彼女は、脚も寒いだろうなと考える。しかし彼女は寒いと
声を出すでもなく、紺色のマフラーを首にしっかりと巻きつけると、

「それじゃ、また二週間後に。……ヤマデラさん」

白い息を吐き出しながらそう言って、こちらに手を振った。

俺と同様に、彼女も俺の苗字だけを覚えてくれたようだった。

3か月前（1）

恥ずかしながら、俺は統合失調症のことをよく知らなかった。だから、例の女子中学生……シンドウさんに、

「私、統合失調症なんです」

とカミングアウトされた時も、正直よく分からなかった。それよりも、彼女がそうやってさらりと自分の病名を口に出したことに驚いた。

大抵の患者は、自分の病気や症状について、話したがらなかったから。

「そうなのか。……えーっと」

「ああ、山寺さんは無理に言わなくていいですよ、病名とか。私が勝手に言っただけ」

彼女は相変わらず、薄い笑みを浮かべていた。

彼女と初めて話したあの日から、一か月が経っていた。前回別れる時に「二週間後に」と言われたものの、すれ違ってしまったらしくて会えなかったのだ。気づけば年も明けていて、彼女と待合室で再会した時の挨拶は「明けました、おめでとう」だった。

「学校は？ もう始まってるの？」

薬を待つ間に当たり障りのない話でもしようと、俺が質問してみると、

「始まりましたけど、登校する気はあまりありません。保健室登校だし、行っても特に楽しくないので」

……当たり障ってしまった感じがした。

気まずさのあまり沈黙した俺。何も言わない彼女。テレビの音だけが、待合室に響く。

「——消してください。いや、チャンネル変えてください」

そんな中、シンドウさんがふいに口を開いた。

自分の膝の上にある鞆、そこに付けてある熊のマスコットを見ながら。

「え？」

「テレビ」

彼女に言われてテレビを見ると、ちょうど夕方のニュースが始まったところだった。番組トップは、三日前に起こった一家惨殺事件についてだ。黄色いテープと青のビニールだけが浮いているように見える、それ以外は何の変哲もない一軒家が、斜め上のアングルから映し出されていた。

「……嫌いな？ テレビ」

俺は質問しながら立ち上がり、チャンネルをいじった。待合室にあるテレビは、患者がチャンネルをいじってもいいことになっている。俺が適当にまわしたチャンネルでは、数年前に大ヒットしたドラマの再放送をしていた。

彼女はちらりとそのドラマを見てから、またもや熊へと視線を戻した。

「嫌い。いや、テレビは嫌いじゃないんですけど。ニュース。いや、政治とかは大丈夫なんです。だめなのは殺人。いや、殺人じゃなくても人の命がなくなったようなの、です。ドラマじゃなくて。小説でもなくて。本物の死。誰かの。命が終わった場所。事故、事件」

「……別に、敬語じゃなくていいよ」

怪しげな敬語と言葉を聞いて、俺の笑顔はひきつった。彼女は熊のマスコットをいじったまま、視線を上げようとしない。まるで熊に言い聞かせているかのように、……独り言のように、話を続ける。

「あれが見えるから嫌い。あれが見えやすい。現場を映すのやめてほしい。どうして取材するかな。なんで気付かない。なんで皆、聞こえないんだろう。あんなはつきり、叫び声、猫みたい、いや、もっと。もっとこう」

「えーっと、あの」

「シンドウさん」

薬局に名前を呼ばれた途端、彼女の独り言はぴたりと止まった。それからこちらを見て、いたずらっぽく笑った。

「……いま、ちょっと引いたでしょ。山寺さん」

「え？」

「山寺さん」

ちょうど俺の名前も呼ばれ、二人で仲良く立ち上がった。

「誰が差別をしているのか」

帰り道、一か月前と同じ紺色のマフラーをした彼女が、俺の隣で呟いた。どこかでお茶でも飲まないかと誘ったのは俺で、ハンバーガーショップのアップルパイが食べたいと言ったのは彼女だった。ということ、病院から一番近いバーガーショップに向けて二人で歩いている時、彼女が不意にそんなことを言った。

「え、なんて？」

二十七の俺が、中学生をお茶に誘うのはまずかったんじゃないかと思いつつ、俺は出来る限り明るい声で返す。周りから見たら、年の離れたカップルどころではない気がする。

彼女は今日も制服姿だ。もしも同じ中学の生徒や教師にこの現場を見られたら、彼女の立場はまずくなるかもしれないと思った。

「——私たちは、弱者？」

身長百五十センチほどだろうか。百七十五センチの俺から見たら、彼女はひどく小さく見える。俺は眉をひそめながら、彼女の次の言葉を待った。

「私たちは弱者なのだと、本人たちが言う。なのに、区別されると差別されたと言う。都合のいい区別ことだけ受容して、他の区別は差別だと言いはる。『あちら』はあちらで、手をこまねいている。『こちら』のことを弱者だと思っているのかどうかは、知らない。ただ、『こちら』が少しでもおかしな行動をとれば、それは病気のせいだと考える。病気という言葉におさめて、納得しようとする。おかしいね、笑っちゃう」

……俺は、彼女の言葉の一割も理解できなかった。彼女は一人でくつくつと笑う。しかしその笑い声が、何かのスイッチでも切ったかのようにプツリと途切れた。

「山寺さん、幽霊って信じる？」

彼女の声はどこまでも澄んでいて、真剣だった。しかし、いきなり方向転換する話題に、俺はついていけずに振り回される。

「えっと？」

「幽霊って信じる？」

同じ質問を二回され、俺は返答に困った。残念ながら俺には靈感がない。いるかいなかと訊かれれば、正直なところ

「信じてないんだね。その様子だと」

俺が答える前に、彼女の方が言い当てた。相変わらず、うつすらとした笑みを浮かべている。彼女が心の底から笑っている顔を、俺はまだ見たことがなかった。

「……心霊特集で、霊能力者が出てくるでしょう。お被^はいたりする」

彼女は心持ち首をかしげながら、俺の方を見上げる。ちょうどその時、数メートル間隔で植えられている街路樹が、一斉に光り出した。空はまだ薄明るいのに、青色の人工的な光が点滅する。彼女は幽霊の話を中途半端なところで区切ると、

「——これ、夕方四時になったら光るように設定されてるんだね。もう十二月も終わったのに。クリスマスは関係ないのか。……冬の間はずっと、この調子かな」

青白く光る木を見上げて、ため息をついた。

「光が冷たい。……なにもしなくてもね、木は綺麗。なのに、それを黒いコードでぐるぐる巻きのがんじがらめにして、人工的な明かりをつけて。——何が楽しいのか、私には分からない」

そう呟いた彼女の背後から、イルミネーションが綺麗だと騒ぐ女

子高生の声が聞こえてきた。

3か月前（2）

夕方のバーガーショップは、高校生で賑わっていた。騒がしいと言いつてもいい。ガラス戸から店内を覗いてみると、客のほとんどは高校生だった。皆、同じ制服を着ている。この近くに高校があるらしい。

ゲラゲラと品のない笑い声を出す男子高校生を見て、シンドウさんは眉をひそめた。

「……人ごみ、苦手？」

少しだけこちらに近づいてきた彼女に、俺はこっそりと問いかける。彼女は首を振り、

「人ごみと言うよりも、こういう笑い声が嫌い」

誰にも聞こえないような小さな声で、そう言った。

結局、アップルパイとドリンクをテイクアウトして、二人で外に出た。寒いけど大丈夫？ と訊いてきたのはシンドウさんで、俺は平気だよと笑った。実際、分厚いコートを着ている俺よりも、スカート姿のシンドウさんの方がはるかに寒そうだと思った。

バーガーショップの近くにあった小さな公園に、二人で足を踏み入れる。園内には小学生が3人いるだけで、その子たちも俺達と入れ違いで出ていった。

鉄棒に滑り台、ブランコ、シーソー、古ぼけた木製のベンチ。彼女が率先してブランコに向かったので、俺はそれに続いた。

ブランコに座り、アップルパイとホットコーヒーを彼女に渡す。

彼女は礼を言っただけを受け取ると、アップルパイの封をあけた。

俺は自分用の紅茶を取り出す。……が、出てきたのは、ただのお湯入りカップだった。目を丸くする俺に、シンドウさんはほほ笑む。

「ティーバッグ、入ってなかった？」

そう言われて紙袋の中を確認すると、底の方から安物のティーバッグがひとつ出てきた。

——今までコーヒーしか注文したことがなかったから、たまには紅茶でも飲んでみようかと思ったものの、

「……しょばい。俺もコーヒーにすればよかった」

俺が素直にそう言うと、彼女はくすくすと笑いながらアップルパイを一口食べた。俺はしぶしぶ、安物のティーバッグを湯につけて泳がせる。バッグから徐々に、紅茶の色と香りが漂いはじめた。その時だった。

「——私には幽霊が見える」

彼女ははつきりとした口調で、そう言った。

彼女の言葉と同時に、冷たい北風が吹いた。俺は両手で紅茶の力
ツプを持ち、彼女の方を見る。彼女は相変わらず、どこを見ている
のか分からない目をしていた。

「山寺さんは、幽霊を信じていない。けれど、『私は幽霊が見える』
……私の話、本当だと思う？」

沈黙する俺の方を見て、彼女は笑った。雪女を彷彿させる、そんな
笑みだった。

「心霊番組によく出てくる霊能力者。あれはインチキだと思っ
よう。それじゃあ私は？ 精神科に通っている私は？ 精神科に通
っている人間が、幽霊が見える、声が聞こえると言ったら？」

彼女は俯き、小さく肩を震わせた。それは寒いからでも、泣いて
いるからでも、なくて。

「ただの幻覚。それが担当医の判断だったし、両親の意見も同じだ
った」

彼女が声を押し殺して、笑っているからだった。

しばらく、言葉のない時間が続いた。俺が紅茶をすすする音と、彼
女がアップルパイを食べる音が少し聞こえるくらいの、静寂。それ
を破ったのは、彼女の方だった。

「信じる信じないは、自由。私が精神科に通っていることも、『壊れて』いることも、本当だから。……あ。言い方が悪かったね、ごめん。壊れているっていうのは、あくまで私の話」

同じ精神科に通っている俺のことを、そして『壊れている』と表現したことを気にしたらしい。謝る彼女に、俺は首を振った。

「君は壊れてなんかない。……幽霊のことは、俺は専門外だから分かんないけど。君は」

「あなたには分からないでしょう?」

俺の言葉を遮って、彼女は言いきる。

「知らないでしょう? 私のこと。君はまだ若いから大丈夫、っていうかもしれない。でもね、もう遅いの。私は壊れてる。ううん、壊れてた。はじめから。欠陥品で、不良品。修理なんてできない」

彼女の声は、諦めているというよりも、事実をただ淡々と話しているだけのようだった。

「……昔から、幽霊が見えてたの?」

俺が尋ねると、彼女は前を向いたままほほ笑んだ。ホットコーヒーを一口すすり、ため息交じりに言う。

「子供のころから、ずっと。けれど物心ついた時から、そのことは隠して生きてきた。精神科に通いはじめたころ、すっかり口を滑らせたけどね」

「誰も信じてくれないの？ 君の話」

俺の言葉に、彼女がようやくこちらを向いた。

「優しいね。私の『妄想』に付き合ってくれるんだ？」

「——だけど君自身は、その幽霊を『本物』だと思ってるんだろう？ なら、本物ってことでいいじゃないか」

「……変わった人」

彼女は笑わない。俺ははたと思いつき、恐る恐る彼女に尋ねてみた。

「——俺の両親、もう死んでるんだ。……どうかな。幽霊とか、見える？」

「見えない」

彼女はきつぱりとそう言って、コーヒーを飲みほした。いや、最後の一口分だけ残してある。俺もよく知っているが、この店のコーヒーは、底の方だけやたらと粉っぽくて苦いのだ。

彼女はこちらを、更にその背後を見て、もう一度、

「見えない」

そう言い放った。俺は後ろを振り返る。そこには、『黒いコードでぐるぐる巻きにされていない』桜の木しか見えなかった。

「……守護霊とか、そういうのはいないのかな？」

俺が尋ねると、彼女は首を振った。

「私は見たことない。あのね。死んだ人間の魂って、二週間程度で『消えちゃう』の」

「消えちゃう?」

「成仏、っていうのかな。とにかく、私には見えなくなる」

無表情のまま、首をかしげる彼女。どうやら、『消えちゃう』ことについては彼女も詳しくないようだった。

「二週間程度って言ったけれど、私が知っている限りでは死んだ日からちょうど二週間で消えちゃう。私のお爺ちゃんもお婆ちゃんも、ガンで死んだ叔母さんもそうだったし」

彼女はそこまで言うと、残っていたコーヒーを土の上に流した。乾いた土は一瞬だけコーヒーをはじき、けれどもすぐにそれらを吸収していく。土の上に残った黒いシミとコーヒーの粉を見て、彼女はおかしそうに笑った。げらげらでも、くすくすでもなく、無言で

「山寺さんのご両親が本当に亡くなってるのなら、二週間以上前に亡くなったのね。二週間以内に亡くなったのだとしても、あなたに『憑いてない』可能性もある。親の幽霊がいつも、子供の側に憑^{いる}くとは限らない。フラフラどこかに行っちゃう幽霊もいるし。……もしくは」

彼女は地面のシミから顔をあげて、こちらを見た。

「私のことを試すために、山寺さんがカマをかけたのか。実際、
両親はまだ生きてたりして、ね」

俺が顔をしかめると、彼女は首を振りながら言った。

「いいの。そういうの、慣れてるから」

「……俺の両親は、本当に死んでるよ。俺が高校生のころに」

俺が小さな声で告げると、彼女は「そう」とだけ答えた。

彼女が俺のことを信用してくれたのかは分からないが、俺の両親
が十一年前に死んだのは、紛れもない事実だった。

2か月半前 (1)

From: 高田望

Sub: まだまだ寒いね

風邪とか引いてない？

会社で、風邪が流行ってるの。

山寺君も気をつけてね。

復職、近いつて聞いたよー。

楽しみにしてるけど、無理はしないでね。

俺は寝ぼけ眼まなこで、彼女からのメールを読んでいた。寝ぼけている
と言っても、今の時刻は昼過ぎだ。恐らく、昼休みを利用してこの
メールを送ってくれたんだろう。

高田望は俺と同じ年の同期で、……高校時代の恋人だった。
たかだのぞみ

俺の両親が通り魔事件で死んだあとも、彼女は俺のことを支えよ
うとしてくれた。——けれど、別れてくれと頼んだのは俺の方だっ
た。

「私じゃ、だめかな」

あの時、彼女は泣き出しそうなのを必死に堪えていた。

「私じゃ、君を支えられない？」

そうじゃない。ただ今は、誰かと付き合うとか、そういうのは考えられない。ごめん。

そう返した覚えがある。

結局彼女は女子大に、俺は国公立に進学し、離れ離れになった。もう二度と、会うことはないだろう。そう思っていた。

だから彼女と再会した時、俺は凝り固まった。いや、彼女も凝り固まっていた。再会場所は、社員食堂。——本当に偶然だったのだが、同じ会社に就職していたのだ。

「…………元気にしてた？」

声をかけてくれたのは、彼女の方だった。

「まあね。そっちは？」

「元気だったよ。ありがとう」

よりを戻したというわけではない。けれど、高校時代に出来た亀裂は、少しずつ埋まっていった。…………亀裂を作ったのは俺で、修復してくれたのは彼女だったけれど。

その後、俺が『体調を崩して』休職すると話した時、彼女は心底複雑そうな顔をした。恐らく、高校時代のことを思い出したんだろう。

「…………たまに、メールしてもいいかな」

遠慮がちにそう言われて、俺は笑った。歪ではあるが、その時の俺に出来る精一杯の笑顔だった。

「ああ。そうしてくれると助かる」

そうして約十年ぶりに、彼女とメールアドレスを交換した。

『元気だよ、ありがとう。もうすぐ会社にも挨拶に行くから』という趣旨のメールを返信して、俺は携帯を閉じた。十三時過ぎ。そのそと布団から這い出ると、洗面台へと向かった。

今日は、通院日だった。

休職してから通いはじめた病院は、土・日・祝日は休みで、平日も十七時までしか診察していない。今はいいが、復職すると通えなくなる。夜間診療、もしくは土日も診察している病院を紹介しよう、と言われるのはある意味当然の流れだった。

顔を曇らせた俺を見て、担当医のてるてる坊主は笑った。

「安心してください、良い医者を紹介しますから」

残念ながら、俺が心配しているのは担当医が代わるのではなくて、彼女と、——シンドウさんと会えなくなることだった。

診察室を出ると、待合室のソファに座っている彼女の姿が見えた。眉間にしわを寄せて、一点を見つめている。彼女の視線の方に目をやると、『大型トラック歩道に乗り上げ 園児五人が死亡』というテロップが、その背後に事故現場が映し出されているのが見えた。俺は無言でテレビに近寄り、チャンネルを変えた。

「……泣いてた」

待合室には、俺と彼女しかいなかった。彼女は俺に向かって言っているのか、独り言なのか分からない口調で呟く。

「子供たち、泣いてたよ。痛かったって。即死じゃなかったのね。怖かったって」

「声まで聞こえるのか」

「うん」

彼女は俯くと、鞆につけている熊のマスコットをいじり始めた。ハセンチほどの黒い熊のマスコットには、腕や頭に包帯が巻かれていて痛々しかった。

「……それ、どうして包帯を巻いたの？」

俺が尋ねると、彼女が顔をあげた。その瞬間は無表情だったが、俺と目が合うとほんの少しだけ微笑んだ。

「私が巻いたんじゃない。はじめから巻かれてたの。最近流行ってる、これ。眼帯してるのとか、絆創膏貼ってるのとか、ギプスして松葉杖ついてるのとか」

「……へえ」

最近の若者の趣味は分からないと思いつつ、俺は彼女の隣に腰掛けた。彼女はマスコットをいじる手を止めると、相変わらず声は出さずに笑った。

「包帯しても眼帯しても絆創膏貼ってもギプスしても、痛いのは変わらないのにな」

ちょうどその時、薬局から二人同時に名前を呼ばれた。

「今更だけど、シンドウさんって中学何年？」

帰り際、マフラーを巻いている彼女に尋ねると、

「中学三年。本当は受験生。来年はフリースクールに行く予定」

俺の次の質問も見越したような回答が返ってきた。俺は思わず苦笑する。彼女の言葉は常に簡潔で率直で、だからこそ分かりにくい時もあった。

——しかし、中学三年生か。十二歳差か。さっきの熊のマスコットといい、ジェネレーションギャップを感じる。

そんな俺の心情を察しているのかいないのか、マフラーを巻き終わった彼女はこちらを見あげてほほ笑んだ。……彼女の笑顔には、

『無邪気さ』がなかった。かといって、邪気があるわけでもない。どこか空っぽに見える、笑顔。

「山寺さんは、三十前？」

「……二十七」

「うん。そのくらいに見える。老けてない」

——これは、褒められているのだろうか。先ほどから苦笑してばかりの俺と、空っぽの笑顔を張り付けている彼女。周囲から見たら、どんな関係に見えるだろう。

そんなことを考えていたら、間抜けな電子音が俺のズボンのポケットから響いた。俺は慌てて携帯を取り出す。メールではなく、電話。かけてきたのは、——高田望だった。

「もしもし？」

メールはともかく、彼女が電話してくるのは珍しい。いや、初めてかもしれない。俺は若干緊張しながら、声を出した。

『あ、もしもし山寺君？ いま大丈夫？』

「ちょっとだけなら。なんなら後で、こっちからかけ直すけど」

シンドウさんの方に目をやりながら、俺は小声で返事する。シンドウさんは俺の方ではなく、黒いコードでぐるぐる巻きにされているイチヨウの木を見ていた。

望は『ううん、すぐに済むから』と前置きした後で、

『直接会って話したいの。山寺君の都合のいい時、ないかな』

「……直接？　今じゃなくて？」

『——直接がいいな。私、電話嫌いだし』

ああ、だから彼女はいつだってメールだったのか。そんなことを思いつつ、俺は自分の頭の中にあるスケジュール帳を確認する。…通院日以外、これといって用事はなかった。むしろ、仕事をしている彼女の方が忙しいはずだ。

「望の都合に合わせるよ」

そう言われるだろうと想定していたのか、望はすぐに言葉を返してきた。

『明日の夕方とか、どう？』

「大丈夫だよ。駅前でもいい？」

『うん。それじゃ、また明日』

電話を切ると、シンドウさんと目があつた。イチヨウの木を見ていたはずの彼女は、いつの間にかこちらを見ていた。

「大切な人、から？」

彼女にとって、『大切な人』の定義はなんだろう。

家族か、友人か、それとも。

「——まあ、そんなところかな」

俺が困ったように笑うと、彼女はふつと息を吐いた。それから、

「本当に変な人。でも、嫌いじゃない。——好き、かもね」

それだけ言うと、一人でさっさと歩き始めた。その後ろ姿が『ついてこないで』と言っているような気がして、俺は呆然と立ち尽くした。

2か月半前（2）

望との待ち合わせ場所は、駅前のファミレスだった。社会人として、もっとお洒落な場所……せめてカフェで待ち合わせしろよと思ったが、『ファミレスがいい』と言ってきたのは望本人だった。

昔と変わってない。そう思った。

テーマパークや映画館を好んでいた同級生に対し、望がデートの時にいつも行きたがったのは近所の公園だった。小規模の割に、遊具だけは豊富にある公園。望は其中でも、大きなスプリングの上に馬の模型をくつつけたような遊具ものを特に好んでいた。

「わざわざメリーゴーランドになんて乗らなくても、これで十分だよ」

公園の近くにあるコンビニでコロッケを買い食いして、たわいもない話をして。

そんな時が何よりも幸せなのだと、いつも言っていた。

——彼女にとって大切なのは、コーヒーが『ドリンクバー』なのか、『豆から挽いたもの』なのかではなく、……俺と共有する時間そのものなのだろう。

「ごめん、待たせちゃったね」

彼女が店に入ってきたのは、約束の時間ちょうどだった。俺は首を振る。

「俺が先に着いただけだよ。それより、なにか食べる？」

「うーん。とりあえず、飲み物だけでいいや。山寺君は？」

「俺も飲み物だけでいい。腹が減ったら、なんか注文するよ」

彼女は向かいの席に座ると、ドリンクバーを二つ注文した。俺はさりげなく、彼女の姿を確認する。俺が休職する前、ショートボブだったはずの彼女の髪の毛は、いつの間にかすっかり伸びている。長さは、肩と腰の間くらいだろうか。少しだけ染めているらしく、若干赤みがかっている。——それ以外は、何も変わっていないかった。ナチュラルメイクを通り越し、薄化粧とすら言えないくらいの化粧。顔は、猫で例えるならアメリカンショートヘア。可愛くて、けれど賢そうに見える。残念なのは、近視用の眼鏡が酷く似合っていないことだけだった。

「……………山寺君、変わってない」

「そうか？」

「そうだよ。高校の時と一緒に老けてないよ」

この前シンドウさんに同じことを言われたのを思い出し、笑ってしまった。望が首をかしげたので、なんでもないと手を振る。しかし、ツボに入ってしまったらしく、笑いが止まらない。彼女はし

ばらく俺の笑う様子を見守り続け、

「……………よかった。笑えるようになったんだ」

やがて、ぽそりとそう言った。そこでようやく、俺は笑うのを辞める。

「本当に迷惑掛けたな。ごめん」

「心配かけたな、にしてくれる？　迷惑っていうと、君の存在が邪魔みたい。それは嫌」

望はそう言うと、ほほ笑んだ。

シンドウさんのそれとは違う、柔らかな笑みだった。

俺はカフェオレを、彼女はミルクティーを飲む。なんとなく気まぐずい沈黙。彼女は机に張り付けられた期間限定メニューを見ていたが、しばらくすると意を決したように顔をあげた。

「あのね、山寺君」

「……………うん？」

「今、好きな人っている？」

単刀直入。俺は口に運ぼうとしていたカフェオレのカップを、机の上に置いた。

——好きな人と言われて、シンドウさんの姿が浮かんた。それが

俺の答えで、でも言えなかった。

十二歳差、相手は中学生。そのことがどうしても、俺の中で引っ掛かっていた。

「……好きな人、いない？」

少しだけ上目遣いで、両手を膝の上に置いて、気まずそうに彼女が訊いてくる。俺はテーブルの端に立てかけてあるメニュー票を横目で見ながら、

「——付き合ってる人はいない」

半分隠した答えを返した。勘のいい望なら、恐らくその意味が分かっただろう。けれど彼女は続けた。

「……高校生の時、すごく後悔した。どうして君の手を放しちゃったんだろうつて」

彼女の言葉も姿勢もまっすぐに、俺はそれに反比例するように猫背になった。後ろめたい。その言葉が一番しっくりくる気がした。

「今回のこともそう。会社を休む前に。もっと早く気付いてあげられなかったのかって、思った」

「——それは」

「私ね。まだ好きなんだ」

軽くめまいを感じる。どうしてこいつは、いつだって真っ直ぐなんだろ。付き合っていたあの頃、よくそう思った。そして、今日も。

「山寺君の、——高志のこと、まだ好きなんだ。馬鹿みたいだよ。ね。中学生みたいだって笑ってくれていいよ。でも、まだ好きなの。…ねえ、」

彼女はまっすぐにこちらを見る。俺は、笑えない。

「私たち、もう一度やり直せないかな」

笑えなかった。

一人で歩く商店街は、酷く寒かった。

結局二人とも、何も食わずに外に出た。「呼びだしたのは私だから」と、俺の分のドリンクバー代まで望が払ってくれた。正直、自分が情けなかった。

すぐに答えを出せなかった。

彼女を受け入れることも、断ることもできずに、曖昧な返事でこまかした。

「待ってるから」

そう言ったのは彼女の方だった。

「返事、待ってる。急いでないから。友達としてでも、いいから。——ただの同僚、よりは格上げしてくれると嬉しいかな！」

最後の一言だけを明るい口調で言うと、望は駅に向かって歩き出した。俺は用事があるからと嘘をついて、ファミレス前で彼女と別れた。

駅前の商店街を、目的もなく歩く。

楽しそうな笑い声も、手を繋いで歩いている幸せそうなカップルの姿も、妙にわざとらしく見える。俺は両手をポケットに突っ込んで、猫背のまま無表情で歩き続けた。

包帯を巻いている熊のぬいぐるみが目について、ゲームセンターの前で立ち止まる。シンドウさんが鞆につけていた、例のマスクコットだ。いろんな種類のそれが、UFOキャッチャーの中におさめられていた。

『包帯しても眼帯しても絆創膏貼ってもギプスしても、痛いのは変わらないのにね』

彼女の声を思い出しながら、俺は財布の中から百円玉を取り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4161z/>

滲んだ世界で、見えない言葉を。

2011年12月19日12時00分発行